

Society5.0で実現する超スマート社会を 目前に私たちの変化を考える

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**



地球の状況は気候変動も含めて、誰も正確な予測が難しい未来が待ちかまえているのでしょうか。先日も報道で、南の島に限らず台湾も海面の上昇で、毎年5.7センチメートル沈下しており、近い将来は台北で生活するのが難しくなる可能性があるとの報道がありました。また、地球の人口が80億人を超え、食料、水、大気、エネルギーが不足するとの警告が発表されています。多くの方が、なんだか不安だけれども、毎日追われていて、余裕がないで済ましているようにも感じます。未来からの借りものであるこの地球を今後も維持するためには、前号(まなびの広場12月号VOL.4)にも取り上げた一人一人のエージェントが求められるのでしょうか。国の各機関ではSociety5.0の社会の到来を目指して、社会全体の様相を変化させようと目標を立て、それに基づいた教育体系の組みなおしなども始まっています。

これまでの社会の変化を振り返ってみると、Society1.0 = 狩猟採取社会(約2万年) Society2.0 = 農耕社会(約2000年) Society3.0 = 工業社会(約300年) Society4.0 = 情報社会(約50年) 時代の変化の速度はどんどん早くなっています。内閣府のホームページには、Society5.0で実現する社会として代表的な4つの変化が発表されています。

Society5.0で実現する社会

- 1/ 必要な知識や情報が共有されずに、新しい価値の創出が困難⇒IoTですべての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、新たな価値が生まれる社会
- 2/ 少子高齢化や地方の過疎化課題に十分対応することが困難⇒少子高齢化、地方の過疎化などの課題をイノベーションにより克服する社会
- 3/ 情報があふれ必要な情報を見つけ分析する作業に困難や負担が生じる⇒AIにより、多くの情報を分析するなどの面倒な作業から解放される社会
- 4/ 人の行う作業が多くその能力に限界があり、高齢者や障害者には行動に制約がある⇒ロボットや自動運転車などの支援により、人の可能性が広がる社会

上記のような社会の変化に対して、私たち、小学校入学前の保育や教育を担う立場の者は、どのような対応が必要なのか、立ち止まってじっくり考える必要があると

思われます。短絡的には、IoTなどの伸長によって訪れる社会に対応するため、伝達や文書などもデジタルで簡便にし、SNSなどが使えるように保育のなかで取り組むことも考えられますが、どうも違っているように感じます。それとは対極的にOECD(経済協力開発機構)などでも「主体的・対話的で深い学び」が幼児教育から小学校以降の教育で目指され、みんな一緒ではなく、個別最適な学習課題や環境を模索する現場が目指されています。また、今までの価値を転換する「ニューノーマルの教育」が提示されるなど、知識と技能を詰め込む教育から、それぞれ個人の資質と能力を大切に、より社会に働きかける学校像が提案されました。教師が決めて児童が従うのではなく、学校に関わるすべての人が主体的に運営に関わるような過去にはなかった運営が提案されています。

小学校就学前の保育は、今まで大切にしてきた「一人一人の能力と可能性」を大切にしながらも、自分たちの見つけた課題を追求する「プロジェクト型」の活動が重要になります。一律の育ちをイメージするのではなく、様々な育ちの子どもたちに非線形な動的カリキュラムが必要となるのです。日々の暮らしや行事なども見直しが必要ですし、家庭や保護者との連携や評価についても模索が必要です。

当機構は今後も園長をはじめ教職員の資質向上を目指して研修コンテンツの整備に努めてまいります。研修対象も保育職に限らず、看護職や栄養/調理職、園の安全対策などにも拡張し、全国隔々の教職員の皆様に届けたいと考えています。



ここがポイント

実践の意味づけと保育者の語る力量について



立教大学現代心理学部 教授／大石 幸二

課題解決のための「語り」

私は、自分自身の専門実務の中で、保育・幼児教育が展開される現場を巡回相談という形で見せていただくことが数多くあります。巡回相談というからには、先生方が何らかの課題解決を目指して、私のような巡回相談員（心理職）を現場に招いて下さるわけです。その際に、事前に問題整理（＝優先順位の高い課題の洗い出し）がなされている現場とそうでない現場とに出会います。解決したい課題は、質の高い保育・幼児教育を目指す以上、後から後から泉のように湧いてくると思います。しかし、有限のリソースの中で対応できることには限りがあります。また、実践できることにも限りがあります。例えば、無理なく実践できることもあれば、わずかな努力で実践できること、実践のためには相当な努力を要すること、一時的に実践できたとしてもその実践を持続することはきっと不可能なことまで大変な幅広さがあります。よって、何を、どういう順で、どこまで追求するかということを絞り込む必要があります。

問題整理ができていない現場では、園内で（その立場を超えて）語り合う雰囲気があります。そして、観察事実をもとにして深い考察が、保育者ならではの、実践の言葉でなされています。また、問題整理が不十分だと感じる現場でも、私のほうからお尋ねすると、しっかりと自分の言葉で説明なさる先生方が数多くいらっしゃいます。「言語化」する力（＝語る力量）があるということです。目標が何で、その目標を実現するためにどのような場面設定を行い、声掛けや示範をどのように工夫して、個別支援をいかに実施しながら、子ども同士の育ちあい、学びあいの場づくりを行われたのか、が説明されます。その延長線上や、グラデーションの中に、さり気ない普段着の支援（＝カジュアルなサポート）を行う余地が生まれるのです。ですから、保育者の「言語化」する力はとても大切なのです。

「実践の意味づけ」への歩み

保育者の「言語化」する力をさらに一歩高めると、「実践の意味づけ」が可能になります。しかし、「実践の意味づけ」となると、たちまち難易度が上がってしまうかもしれません。子どもたちの育ちや発達をめぐる知見は、日進月歩の勢いで増加し蓄えられていきますし、すべてを網羅的に理解して、自分のものにするにはたやすい

ことではありません。その一方で、子どもの感覚と運動、認知と言語、情緒と社会などの機能については、それらの取舍選択を超えて共通に検討される内容であるだろうと思います。以下では、このことについて、簡単にご説明しましょう。

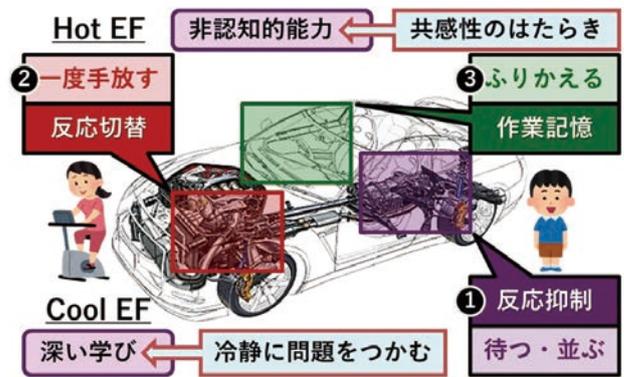


図1 実行機能の基本的な要素を検討するための模式図

子どもたちが行動を切り替えて、次の活動に移るための準備を整え、円滑に行動を進める自己調節力を獲得することは重要です。これは車の運転に似ています。図1に行動を計画的に進める実行機能（EF）と呼ばれる認知機能をごく簡単に説明しました。子どもを自分の心身という車の運転者に見立てた場合を説明しています。①は、ブレーキを上手に踏み込むこと、②は、ハンドルをさばいて目標に自分を向けること、③は、カーナビを利用して振り返りに基づいて経験を糧にすることを表しています。そして、それらの生涯生きて役に立つ認知機能を「待つ・並ぶ」ことや「一度手放す」こと、「話を聴いて振り返る」ことのなかで日々体験していることを説明しています。これらの意味がわかって、指示や手がかりを提示できる保育者と、意味がわからず形式的に実践する保育者では、子どもに与え得る肯定的影響が質的に異なってきます。日々繰り返される基本的な営みであればあるほど、その影響度は大きくなります。そのためにも、「語り」を積み重ねる努力を、これからも各園で積み重ねていただきたいです。私は、このような地に足のついた実践が、今後も保育・幼児教育の現場で大切にされていくことを願っています。

子どものケガ予防において大切にしたいこと

名寄市立大学 特命教授／猪熊 弘子

よく「子どもはケガをして育っていくもの」と言われます。皆さんも子どもの頃、さまざまなケガをした経験があるのではないのでしょうか。人間は成長するに従ってケガをする可能性が増えていくものです。生まれたばかりの赤ちゃんは自分では動けないので、他者から何か力が加わらない限りはケガをすることはありません。歩けるようになれば転ぶようになります。走るようになればスピードが加わって、転んだときのケガはより大きくなります。このように子どもの成長発達によってケガの可能性も増え、複雑化していきませんが、同時に子ども自身が痛い経験をしたことを記憶し、身体を自在に操れるようになるという別の発達によって、以前なら転んでいたところで転ばなくなる、ということも起きてきます。

同じ月齢、年齢の子どもであっても、身体や心の発達の違い、また無鉄砲に進んで行く子と慎重な子といった性格の違いによっても、ケガの起きやすさが違います。園でケガやヒヤリハットのデータを取っていくと、誰がどの時間帯にどこでどういうケガをしやすいか、ということがわかってきます。ヒヤリハットの多い子、ケガをしやす子は確かにいるので、それらをふまえて、必要以上の大きなケガをしないように対処していかなければなりません。

しかし、子どもを一切の危険から遠ざけることも良いこととは言えません。子どものケガ予防に関する海外のレビュー研究でも、「子どもの屋外での危険な遊びを制限しすぎることは、子どもの発達を妨げることが示唆されている」(Brussoni, et al., 2012)^(注1)と指摘されています。子どもが成長していく過程で、身体的、知的発達に従い、自ら危険を判断し、身を守る術を身につけていくこともまた重要なのです。匙加減が難しいところですが、重大な事故にはつながらずに子どもがチャレンジできるように、園庭等の保育環境を整備していく必要があると言えるでしょう。

大切なのは子どもに無理をさせないことです。保育者が子どもに「挑戦してほしい」という願いを抱くのは理解できますが、あくまでもその子の気持ちや発達に沿ったものでなければ、大きなケガにつながる可能性があります。子どもが自分で「無理だ」と判断して止めることも「主体性」とであると認めることが、保育者にも子ども同士の間にも必要です。また、子どもが自分で登れない場所に保育者が力を貸して乗せてあげたりすることも、不要なケガを招く要因となります。子どもに無理なことをさせることに教育的な意味はありません。子どもの気持ちや発達を理解した上で、子どもが自分でできるようになるまで待つのが保育者の役割なのです。そういう意味では、子どもが自ら判断し、無理なくやりたい遊びを

行う子ども主体の遊び中心の保育にしていけることが、安全につながると言えるでしょう。

許容されるケガの範囲は？

現在、子どもが幼稚園で治療に30日以上かかるケガをした場合には、自治体を通して内閣府に報告する義務が課せられています。全国から寄せられたデータを元にした2021（令和3）年の概要報告^(注2)では、幼稚園・幼保連携型認定こども園・幼稚園型認定こども園において、合わせて540件の事故が報告されたことが明らかになっています。また、文部科学省の日本スポーツ振興センター学校安全web「学校事故事例検索データベース」^(注3)によれば2005～2020年の間に、共済保険の死亡見舞金が支払われた幼稚園での死亡事例が15件、交通事故などで第三者から保険金が支払われたことにより供花料のみが支払われた事例が6件、障害見舞金が支払われた事例が121件起きています。小さなケガは起きても、死亡事故や傷害が残るような大けがはもちろん、治療に30日以上かかるケガは起こしてはいけないものだと考えて、予防対策をしていく必要があります。

子どもの発達を踏まえた環境構成を

園で子どものケガがあったら、必ず「事故簿」に記録しておいてください。事故簿には「なぜそのケガが起きたのか？」という分析や「今後どのようにケガを防いでいくか」という対策を書く欄があると思います。そういった欄によく記入されがちなのが、「ルールがあるのに子どもが守らないから」「走らないように言っているのに子どもが走るから」といった分析や、「今後はもっと子どもによく見るように伝えます」といったものです。いずれも有効な分析や対策とは言えません。そういった見方は、ケガを子どものせいに行っているからです。前述したように子どもは発達すればケガをするものです。

子どもが走ってケガをしたのであれば走らないような環境に、子どもがよく見えないなら見えるような環境に、お約束やルールで縛るのではなく、環境を変えて対策をする必要があります。

参考文献

注1：Brussoni, et al., (2012) Risky Play and Children's Safety: Balancing Priorities for Optimal Child Development, International Journal of Environmental Research and Public Health, 2012, 9, pp.3134-3148,

注2：内閣府子ども・子育て本部「[令和3年教育・保育施設等における事故報告集計]の公表について」(2022年7月)
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/r03-jiko_taisaku.pdf

注3：日本スポーツ振興センター「学校事故事例検索データベース」(2022年8月)
https://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/anzen_school/tabid/822/Default.aspx



一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
第14回ようちえん絵本大賞
 ～新しい絵本を見つけよう～

**大賞
14冊が
決定**

第14回ようちえん絵本大賞は、“子どもに読み聞かせたい絵本”、“お父さん・お母さんに読んでほしい・お勧めしたい絵本”、“まだ多くには知られていない素晴らしい絵本”を選考の基準として、(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・調査広報委員会が過去おおむね8年以内に出版された絵本の中から選考を行いました。その結果、特別賞3作品を含む14冊が絵本大賞に選ばれました。

調査広報委員一同、これからも子どもたちと絵本との出会いの一助となるよう努めてまいります。なお、参考までに調査広報委員会が絵本の紹介文を記載させていただきました。

第14回ようちえん絵本大賞 受賞一覧

	絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
特 別 賞	(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長賞 しらすどん 最勝寺朋子 (作・絵) 岩崎書店	私は釜揚げシラス丼が大好きです。どんなに美味しそうなシラス丼が出てくのかとページをめくると、6ページから一気に地球規模の展開になります。食物連鎖やSDGsへと話は進み、表紙から受ける印象とは全く別の世界へと導かれます。作者はこの絵本のために実際にシラス漁を体験したり、海に潜ったりしたそうです。しかし、最終的にはとても美味しそうな釜揚げシラスが描かれ、私は大満足でした。
	調査広報委員長賞 あみだだだ 谷川俊太郎 (文) 元永定正 (絵) 中辻悦子 (構成) 福音館書店	「あみだだだ あみだだだ」声に出して読むと「あら、楽しい」。あみだのせんはどこへ行くのでしょうか。右に曲がって左に曲がって。わらべ歌のように楽しい言葉が並んでいます。読む人によって遊び方は十人十色。絵本は楽しい、楽しいと実感できる一冊。
	こどもがまんなかしんぶん賞 世界はこんなに美しい アンヌとバイクの20,000キロ エイミー・ノヴェスキー (文) ジュリー・モースタッド (絵) 横山和江 (訳) 工学図書	いろんな場所に行きたい、世界中を見てみたいという思いで、オートバイにまたがり世界一周を実行した女性の実話です。いろんな国の風景やそこで出会った人々、数々の冒険が描かれ、その颯爽とした姿に憧れとロマンを感じます。「未知の世界を体験することに億劫にならないで!」「いつも好奇心を持っていよう!」と呼びかけてくれているような絵本です。

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
<p>戦争が町にやってくる</p> <p>ロマナ・ロマニーシ、 アンドリー・レシヴ（作） 金原瑞人（訳） ブロンズ新社</p>	<p>上半分が青、下半分が黄色のウクライナの国旗は青空の下に広がる小麦の大地を表しているとか。しかし、美しい豊かな土地を持つウクライナは未だに戦火にさらされています。ウクライナの作家が描いたこの本は、希望を捨てないでみんなで前を向くことで平和がやってくるメッセージがちりばめられています。</p>
<p>あおのじかん</p> <p>イザベル・シムレール（文・絵） 石津ちひろ（訳） 岩波書店</p>	<p>「こなゆきいろ」「マシュマロいろ」「おはじきのいろ」等々。青には感性豊かにたくさん色があります。そんな青の世界に浸れる本。寝る前にこの本を開くと、「ゆめのいろ」の青の世界が広がりそう。美しい色合いに心が癒されます。</p>
<p>こたつ</p> <p>麻生知子（作） 福音館書店</p>	<p>畳の部屋がない住宅が増え、こたつのない生活をしている家庭も増えています。この絵本はある家族の大みそかの1日を、こたつを中心に集い、また去っていく人々の姿を通してリアルに淡々と描いています。しかも定点カメラのように天井から俯瞰して眺めるアングルは視覚的にも斬新で、絵を眺めているだけで楽しくなってきます。こたつが懐かしい昭和レトロ世代にとってはノスタルジックで心に沁みる絵本ですし、こたつを知らない子どもたちの世代にとっては新しい発見があるかもしれません。</p>
<p>ハナはへびがすき</p> <p>蟹江杏（作） 福音館書店</p>	<p>ハナは爬虫類が大好き。中でもへびが一番好き。お人形もリボンも嫌いじゃないけど、やっぱりハナはへびがすき。でもみんなはあんまり好きじゃないみたい。先生までどこかに捨ててきなさいって言う。そんな時、私もへびが好きと言ってくれる友達が現れて…。みんなと同じじゃなくてもいい、みんな違ってみんないい、ということを知ってくれる絵本です。ダイバーシティ&インクルーシブの視点からも評価できる作品です。</p>
<p>「はやく」と「ゆっくり」</p> <p>張輝誠（文） 許匡匡（絵） 一青妙（訳） 光村教育図書</p>	<p>パパとママはいつも「はやくはやく」と言う。おじいちゃんとおばあちゃんはいつも「ゆっくりゆっくり」と言う。ぼくは「はやく」と「ゆっくり」に挟まれてどうすればいいんだろう？ これは時間という概念が芽生え始める幼児に、「時間」をどう捉えるかは実は自分の生き方やものの見方、考え次第でどのようにでも変化するものなんだよ、ということを知りやすく教えてくれる、知的で心温まる絵本です。</p>
<p>きみのことがだいすき</p> <p>いぬいさえこ（作・絵） PIE International</p>	<p>森にくらしている小さな動物たち。悲しんでいたり、悩んでいる動物たちへやさしい言葉をかけてあげます。心がこもった魔法の言葉は、お互いをhappyに。この本が、子どものこと・家族のことを考えるきっかけになったり、自分にとっての魔法の言葉を探すきっかけになるとうれしいです。 子育てに悩んだり・余裕がない時にこそ、親子で読んでほしい一冊です。</p>
<p>めんぼうズ</p> <p>かねこまき（作） アリス館</p>	<p>めんぼうズってもちろん「綿棒たち」です。洗面所や化粧台においてあるあの綿棒たちが主人公です。普段はじーっとしているのに、というか生きてるなんて予想だにしていまらなかったが、夜になると次々と飛び出していくのです。めんぼうズたちの軽やかで自由な動きにワクワクします。ファンタジーです。なんてシュールなんでしょう。そして美しいのです。</p>

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
みつ timatima (作・絵) 金の星社	コロナ禍という時宜を得た作品。みつ状態が問題のない時は、みんなで楽しそうに「みつ」になっていたが、咳をしている一匹のコロナ感染者が出てしまうと感染が広がり、いっぺんにざわついてしまい回りから仲間が消えてしまいました。しかし、正しい対処をすることによって、また、賑わいが戻るが、感染対策はしっかり守ろうという物語です。
カピバラがやってきた アルフレド・ソデルギット (作) あみのまきこ (訳) 岩崎書店	平和に暮らしていたニワトリ小屋にカピバラがやって来ました。初めは追い返そうとしましたが、帰ると猟師に撃たれてしまうので帰ることは出来ません。そこでニワトリは4つの約束をします。カピバラは約束を守り、次第にニワトリと共に生活するようになります。もしかすると、猟師は戦争を、カピバラは難民の表しているのかもしれない。日本は難民の認定率が低い国。ニワトリになれるでしょうか。
なぞなぞのみせ 石津ちひろ (なぞなぞ) なかざわくみこ (絵) 偕成社	絵本の中には専門店が立ち並ぶ商店街がいっぱい！最近はやネットやネットで物を買うのが主流となっていますが、専門店にじっくりお買物するのも楽しいですね。なぞなぞを通じて店内をくまなく見渡し、お買物気分にもなれると共にじっくり観察する力も養えそうです。親子でなぞなぞにチャレンジして下さい！子ども達の方が早くこたえられるかも!!
ねこがさかなをすきになったわけ ひだのかな代 (作) みらいパブリッシング	この本の表紙を見た時、「なんでだろう!？」というわくわくした気持ちが湧き上がりました。猫は魚が好き。なんとなくイメージはあるものの、理由を深く考えることはありませんよね。猫と魚が互いを思いやる気持ちや行動から、少しずつ好きな理由が分かってくるとお話の中に出てくる歌をきっと一緒に歌いたくなりますよ。相手の喜びが自分の喜びになる。そんな素敵な気持ちを持ち続けたい絵本です。

令和5年度賛助会員（園児の保護者等） 入会申込書について

「まなびの広場」をお手に取っていただいております先生方には、当機構の諸事業に対し、ご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。

さて、当機構の賛助会員のお礼としてお配りしております「こどもがまんなかしんぶん」は、令和4年度よりデジタル配信の開始を含め、大きなリニューアルをさせていただき、多くの方に反響をいただいております。

令和5年度の賛助会員入会申込書は、2月下旬以降順次各幼稚園・認定こども園にお送りいたしますのでご確認くださいませと幸いです。

これから子どもたちが幼稚園・認定こども園、ご家族での過ごす時間が豊かになるよう事業を行ってまいりますので、是非ご活用いただければ幸いです。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

【令和5年度のこどもがまんなかしんぶんについて】

■会費：1口・年間250円

■入会特典：年10回（紙媒体6回、デジタル配信4回／8月と3月を休刊予定）

子ども主体における行事の在り方

幼保連携型認定こども園せいめいのもり 山本 里奈

子どもの“やってみたい、やってみよう、なんでだろう”を大切にしているのが自園の日常の保育です。しかし発表会となると、劇や踊り等、保育教諭が決めた演目を楽しむ形となることに4年程前から違和感を抱きました。

その中でまず最初に浮かんだ問題が、衣装の必要性です。保育教諭が思うさぎの色は白だけど、子どもの中ではピンクや茶かもしれない。それならばイメージ通りのものを着る為に、子ども自ら作った方が存分になりきれし、再現に伴う試行錯誤こそが考える力や発見に繋がります。

またその場所も狭いステージの上でできることは限られるし、“発表会＝ホール”に囚われているだけではないか、園内好きな所でできるようにすれば、それだけ可能性が広がると考えたのです。内容も、沢山の“練習”をするものと、誰かを招待する為の“準備”だとどちらが子どもにとって、当日に期待が膨らむでしょう？日常的に自分たちの発想を生かし遊びを広げていく、自園の子どもたちには、決められたセリフや演目より、自分の力で作り出す答えのない内容の方が、満足がいくし、保護者の方にも当日だけではなくその過程、子どもの日々の力を感じてもらえろと考え、参加型へと変化しました。

また、見せる為の一般的な形でないのなら“発表会”という行事名にも違和感が生まれ、現在は“もりのいろ”という名前です。（木に色付く葉が各々違うように、子どもの個性の色も十人十色。その一人ひとりの色と、混ぜり合った時のクラスカラーを感じてほしいという願いが込められています）様々な違和感を長い年月を掛けて、追求し変動を続けてきました。

ポスター発表を視聴してくれた保育教諭の皆さんの多くが、行事を変えたい気持ちはあるけど、不安もあるという方でした。ぜひ意見交換ができる機会や、自園の保



育について発信できる機会、また視察に来ていただくお互いの学びに繋がると感じます。

さて、私たちの社会もそうであるように、固定概念を壊し、常に変化し続けることが、保育の世界にも大切だと職員間で共通理解をし、その変化の過程や思いが保護者の方に届くように発信することを大事にしています。これからも、今回の発表のみならず、せいめいのもりは子どもの“今”に合わせ、進化し続けていきます。

私達は衝撃緩和帽の開発を通じて大切な子供達の未来を守ってゆきます！

ゴツツン!! から、
まもってあげたい。

子どもの頭を守る帽子

この帽子痛くない！

企画・開発 **株式会社リード**

〒028-6104
岩手県二戸市米沢字家ノ上39-1
<http://hot-anshin.com//index.php>

お問い合わせはこちら
安心帽販売

TEL 090-8644-5654
FAX 042-563-8907

遊具でふいに

地震でケラリ

コロナ禍から見えてきた、新たな保育の可能性

宮前幼稚園 塩川清里名
宮前おひさまこども園 佐藤 友佳

例年3学期に行われている劇遊びが新型コロナウイルス感染拡大により中止となり、それに代わる行事「チャレンジ活動」を行いました。今回の発表では、活動を通しての子ども姿や保育者の試行錯誤について発表させていただきました。

チャレンジ活動では、子どもたちが自信を深めることを目標にしていました。3年間の園生活を通して、好きになったこと、得意になったこと、新たに挑戦したいことを自分で決め、目標に向かって挑戦していきました。（コマ・木工・手芸など）

今回の発表では、Mちゃんの事例を取り上げました。Mちゃんはピアノが得意で毎日のように弾くことを楽しんでいました。初めての活動ということもあり、担任はMちゃんの挑戦をどのように支えていけばよいか迷っていました。そこで、主任に相談したところ、歌が上手な先生がこども園にいるため、「演奏会」を開催することで、それまでの準備や練習をMちゃんが計画を立てるなど、演奏以外の部分で挑戦する機会ができれば成長に繋がるのではないかとアイデアが浮かびました。

早速、Mちゃんに「演奏会」の提案をすると、「やってみたい！」とやる気満々。実現に向けて動き始めました。その矢先、新型コロナウイルス感染者急増に伴い、対面で予定していた演奏会が難しくなりました。そこで、iPadやパソコンを駆使し、リモートでのコンサート開催に向けて準備を進め、当日もMちゃんの友だちや、リモートで繋がったこども園の子たちの応援を受けながら、コンサートは成功に終わりました。

チャレンジ活動を通して、子どもたちが自分で決めたことを、先生や友だちに支えられながら乗り越えたことでの達成感を感じられたように思います。また、保育者も子ども一人ひとりと向き合い、子どもの思いや願いを共に実現していくことの豊かさを感じることでした。



動となりました。

今回発表させて頂く中で、「チャレンジ活動」を通して子ども達の可能性や保育者の援助の重要性に改めて気付くことが出来ました。また、他園の先生方から意見を頂いたことで課題や意識していくべき関わりを見直すことが出来ました。ありがとうございました。

 Seagullkids

こどもの笑顔に勝る制服はない。

株式会社 矢部スロカッティック

URL: <http://www.seagull-yabe.co.jp> E-MAIL: yabepro@seagull-yabe.co.jp

本社	〒241-0821	横浜市旭区二俣川 2-85-2	TEL 045-363-6871	FAX 045-361-3085
東京支店	〒179-0084	東京都練馬区水川台 3-21-14		TEL 03-6281-0025
千葉支店	〒276-0026	千葉県八千代市下市場 1-13-8		TEL 047-481-7723
埼玉支店	〒330-0604	埼玉県さいたま市大宮区堀の内町 2-1-1		TEL 048-640-3003
仙台支店	〒981-3131	宮城県仙台市泉区泉中央 1-47-1 アコーズ泉中央 103		TEL 022-218-3217
大阪支店	〒653-8104	兵庫県西宮市天瀬町 25-15 KIマンション 1F		TEL 079-969-6510
札幌営業所	〒007-0834	札幌市東区北 34 条東 14 丁目 3-1 マンション東堂 1F		TEL 011-712-8088
福岡営業所	〒811-0214	福岡県福岡市東区和白菜 2-14-28 エクセル和白 103		TEL 092-605-5080
名古屋営業所	〒454-0083	愛知県名古屋市千種区北千種 2-3-18 1F		TEL 052-778-7272
広島営業所	〒721-0555	広島県福山市新深町 3-27-8		TEL 084-953-8818
仙台工場	〒981-0504	宮城県東松島市小松字総田 110		TEL 0225-82-8111
稚内工場	〒097-0001	北海道稚内市末広 5-35-1		TEL 0162-32-8111
物流センター	〒981-0504	宮城県東松島市小松字総田 108		TEL 0225-82-8154
第二物流センター	〒721-0555	広島県福山市新深町 3-27-8		TEL 084-953-8818



～悩める遊びの環境構成～

「そうだ！ヒントは子ども達の遊びを見つめる保育者の視点！
保育者が子どもの遊びから気づきを得るためにやってみたこと」

ひかり幼稚園

稲葉 望月 池田 純子 本嶋 麻耶

■問題点・対する実践方法

これまで、自園ではクラスごとに環境設定を行っていましたが、園全体・学年を超えた環境作りを始めました。

子どもたちの「やりたい」「もっとこうしたい」が生まれ、遊びこめる環境を構成していくために何を必要とするのか？『今の私達に必要であると感じたこと』に皆で向き合いました。大きなポイントは子どもの遊びを見つめる視点です。どうしたら、保育者達の目線（概念）を変えられるかをチームで考え、試行錯誤している現在進行形の様子を発表しました。

まずは「今の私達に必要であると感じたこと」を整理します。

①まず、その「やりたい、もっとこうしたい」が生まれ、展開される環境とはどんな物なのか？を話し合い、共有すること。

②上記①で考えだした環境を保育者が具体的にどうサポートして、展開させるのか？を検討し、具体的な方法を生み出す。

③子どもの遊びを見つめる眼差し、視点をどう磨き、保育者同士、その視点を切磋琢磨していくシステムを構築する。

上記3点を実践するために始めたことは、まず、「子ども達の遊びをしっかりと見つめて様子を把握すること」でした。

そこで「定期的、組織的にミーティングを行うこと」「教材研究を積極的に行うこと」を取り入れていきました。

定期ミーティングは、自分の子どもの見取りを整理するだけでなく、他の保育者の視点での捉え方を知るチャンスとなります。教材研究を行う際には、これまでの既成概念を取り払い子どもの遊びがどんどん広がるものを探して試すことを意識することで、選ぶものの幅が広がります。



■実践結果

旬の遊びが生まれ、「遊びの継続⇒展開⇒収束」していく様子を、保育者自身が感じられるようになってきました。子どもの遊びの様子にあわせた保育者のサポートに迷いながらも楽しんでいきます。より具体的に子どもの姿を伝えあいながら保育者同士が話せるようになりました。また、遊びの様子の変化とともに、子ども達に何が育っているかを保護者に向けて発信していくチャンスとして捉え、どのような形で伝えていくかを今後の課題としていきたいと思えます。

今回、このような発表の機会をいただき、自園で迷っていることを見つめなおし、課題抽出・解決への実践・ふりかえりという流れを整理することができました。日々、子どもたちとの時間は流れ、成長・変化を重ねていく中で、保育者がしっかりと視点をもって環境を構成することの大事さを改めて感じました。ポスター発表の分科会に参加してくださった先生から「子ども達が遊びの場面で困っている時、どのようにサポートされていますか？」というご質問があり、環境としての「保育者のスタンス」という気づきをいただきました。どこまで見守って、どこからどのようなサポートをするのか…明日からの保育の中で、心において子ども達との関わりを深めていきたいと思えます。

 snapsnap スナップスナップ

お問い合わせ
ご相談はこちら



自然な表情を撮影して
新たな価値提供を

園でのお子さまの日常を保護者さまに写真でお届け！「スナップスナップ」はカメラマンや先生の撮影をサポートします

自動撮影カメラ
貸出無料



『子どもどうして話し、考え、遊びや活動を自ら生み出す保育をめざして』

～子ども・保育者・保護者の視点から考える～

幼稚園型認定こども園 高槻双葉幼稚園 伊藤 奈央 岡部 祐輝 中島 円

(1) これまでの当園の保育変遷の過程として

当園では、約10年前より、子ども主体の保育に向けて、「環境構成」の見直しや、「子ども理解」を高める取り組みを以下の通り、行ってきました。

(環境構成の視点)

- 保育環境評価スケール（ECERS：エカース）を活用しながら、子どもが遊びを選択し、つなぎ、広げることのできる環境構成を保育者が考えていくようになりました。

(子ども理解の視点)

- 「自園における子ども主体とは何か」ということを理念とともに考え、園内公開保育や、子どもの遊びを見取り理解する研修（動画を視聴し保育者間で語り合う）などを通して、子ども理解の視点を養うことを行いました。

(2) 子ども主体を考える中での具体的な取り組みについて

環境構成を変えたことや、自由遊びの時間を長く確保したことで、子どもの遊びに変化が生じ、子どものやってみてみたいというアイデアや声が多く出るようになりました。日々の活動から徐々に行事などにも変化が生じるようになり、例えばこれまで運動会のリレーの走順など、保育者主導で決めていたことが、「どうすれば勝てるか」、「どのような練習をすればよいか」など子どもたち自らが時間をとり考え、練習時間の確保を要望するなどの姿が見られました。はじめは年長中心の実践から、異年齢交流や保育者同士の共有が進むことで、他学年にもその動きが派生してきました。

(3) 保育者の変化として

保育者間での振り返り時に、保育者のうれしかったことを交流し、育ちを喜び合い、次月のねらいにつなげたり、学年グループ以外の多様なグループでワーク・対話型の園内研修を行い、同僚性を高める取り組みを行ったりするなど、保育者間で保育理念・子ども理解/解釈・考えの共有をより行うことで、子どもたちに対する言葉がけや、援助するタイミング、方法などに変化が生じました。

(4) 今後の展望として

見えにくい幼児期の子どもの育ちを、保護者や地域の方とともに喜ぶことができるために、子どもたちのたどった過程、その意義や意味、活動を通しての子どもの変容などを、分かりやすい言葉で伝えていくという「保育の可視化」の面をより強化していく必要性を園として感じています。そのためには、保育者個人の主観的な子ども理解だけでとどまらず、園全体（チーム）で子どもを見る眼を養い、同僚間で姿や育ちを共有し、丁寧に解釈する力もより一層求められます。これらのことを高めていける組織、システム、環境を構築できるよう邁進したいと考えています。



私たちは幼児教育用品を通じ、幼児教育の質の向上に貢献します。



機構からのお知らせ

「事務職等向け」オンデマンド研修のご案内（第一期）

令和4年11月7日から令和5年2月6日まで開催していた、「処遇改善等加算Ⅱに対応したオンデマンド研修（10コンテンツ）」では、設置者・園長の先生方を始め多くの教職員の先生方に受講していただきました。心より感謝申し上げます。

この度、3期に分けて、計14コンテンツの「事務職等向け」オンデマンド研修を令和5年2月7日より配信を開始しました。今回の配信内容は事務職等（事務、バス運転手、バス添乗員、厨房職員、看護師）の専門分野及び、幼稚園・認定こども園で働く上で大切な内容になります。なお、本研修は処遇改善等加算Ⅱに対応した研修となりますので、是非、研修の受講をご検討いただきますようお願い申し上げます。

【研修内容（第一期）】

1. 社会人マナー① 接遇&業務の遂行の基本動作研修
2. 社会人マナー② 危機管理&子ども虐待の再確認研修
3. 遊具安全点検について
4. 保育事故防止の取り組みについて
5. 職員による子供への虐待を予防するために
6. 労務初級1
7. 教育保育施設における看護職の役割

【申込期間】 令和5年2月7日(火) 10:00～4月5日(水) 17:00

【動画視聴期間】 令和5年2月7日(火) 10:00～4月6日(木) 17:00

【3択5問提出期間】 令和5年2月7日(火) 10:00～4月13日(木) 17:00

【申込方法】 幼稚園ナビより、申込を随時受付中でございます。

ご不明な点等ございましたら当機構までご連絡を下さい。

＼ 対面型リアル実践学会が帰ってくる！ /

第14回 幼児教育実践学会

期間 2023年8月18日(金)・19日(土)

会場 東京都 大妻女子大学千代田キャンパス
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地

テーマ 「新しい時代を伸びやかに生きる」
～社会に開かれた質の高い幼児教育を～
8月18日：基調講演Ⅰ・Ⅱ / 研究者によるプレゼンテーション
19日：口頭発表及びポスター発表

定員 600人 参加費 7,000円



第14回幼児教育実践学会

第1次案内について (2月中旬以降各都道府県事務局から各園へご案内いたします)

口頭発表・ポスター発表で各園の実践発表を大募集しています。

実践発表の申込期間について

- ・口頭発表(20発表)：2023年2月10日(金)～4月21日(金)まで
- ・研究者(大学教員)発表：2023年2月10日(金)～5月22日(月)まで
- ・ポスター発表(50発表)：2023年2月10日(金)～5月22日(月)まで

第2次案内について

「開催要項」「参加申込」は、5月以降ご案内いたします。

※次年度(令和6年)はオンライン研修となる予定ですので、今年度(令和5年)の対面研修で保育実践を語りあい、対話の中から学び、自身の保育を深めましょう。是非ご参加ください。